

# ひとむれ

二〇一四年十月号

## 卷頭言

校長 仁原正幹

九月発行の九〇三号で機関誌『ひとむれ』の歴史や現況についてお伝えしたところですが、一〇月発行の本九〇五号でもその続きを記載させていただくことにしました。先月号と今月号の間で通巻号数が一号飛んでいるのは、『創立一〇〇周年記念誌Ⅱひとむれ』と

いう印刷製本された冊子が通巻九〇四号として九月二四日の創立百周年記念式の日に行き行かれていたからです。

読者の皆さんはもうお気づきのことと思いますが、今号から『ひとむれ』月刊号についても、『朗読会』と併せて手書きを廃して活字に切り替えることにしました。ほんの数ページの小冊子とはいえ、毎月一日発行を厳守してきた『ひとむれ』と『朗読会』の作成には

実は非常に苦勞してきました。毎月月末になると、締め切りギリギリに集まってきた原稿を二人の女性職員が手分けして手書きで版下を作成し、それを印刷して郵送の準備をしているのですが、通常業務の合間を縫っての作業であり、いつも綱渡りのような状態でした。

近頃ではほとんどの原稿がパソコンのワープロ機能で作成されており、既に電子化され

活字となつてゐるものをわざわざ手書きに変換する作業をしています。さらには、手書き故に文章の修正やレイアウトの調整にも手間がかかり、大きな負担となつていました。永年愛読していただいている方の中には熱烈な手書きファンもいらつしやるようですし、私としても八四年間続いてきた手書きの伝統を途絶えさせることには正直躊躇いもありましたが、近年の慢性的な人手不足の状況もあり、

効率的な事務遂行と誌面の一層の充実を図るために、思い切って活字化に踏み切らせていただくことにしました。どうかご理解のほどお願いいたします。

余談ですが、『ひとむれ』八四年の歴史の中でも、活字化を希求していたことがあったようです。前号でもご紹介しましたが、『ひとむれ』誌は元々生徒の自治会「一群会」の機関誌として出発したものであり、昭和九年

発行の『人道』（これも家庭学校の機関誌ですが）誌面の「一群會の近況」という文章の中に、「一群會の出版部も発展して活版印刷機を設置して日刊の『一群』を発行するやうになつたらどんなに愉快のことだらう。」という記載が残っています。

ということ、新装成つた『ひとむれ』と『朗読会』をお届けします。引き続きご愛読いただければ幸いです。

百周年記念式のことについては、次号に記  
させていたたくつもりです。